

良経と『風雅集』試論：菖蒲詠を起点として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 君嶋, 亜紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7505

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



良経と『風雅集』試論

——菖蒲詠を起点として——

君 嶋 亜 紀

一 視点——「雨の夕暮」から

『新古今集』巻第三・夏部の「菖蒲」歌群（二二〇～二二四）は、藤原良経の次の歌からはじまる。

五首歌人々によませ侍りける時、夏歌とてよみ侍りける
撰政太政大臣

うちしめりあやめぞかをるほととぎす鳴くや五月の雨の夕暮

（『新古今集』夏・二二〇／『秋篠月清集』夏部・一〇七七「五首の題の中、夏の心を」）

古典和歌の菖蒲は、現在いうところの初夏に咲く紫の花、アヤメではない。水辺に生えるサトイモ科の多年草シヨウブのことで、泥中に長い根茎を伸ばし、葉は剣状、全体に芳香があり、邪気を払うとされ、端午の節句にその葉を屋根に葺いたり、根を贈ったりした。年中行事とも密接して定型的な表現を促すこうした題材のもたらす制約は『新古今集』の撰歌にも見て取れる。同集では「菖蒲」の語は夏部の四首に加え、哀傷や恋等、計十一首に見える。¹⁾五月五日の節句に直接接触している歌が大半で、作者も新古今歌人は右の良経と続く藤原俊成（二二二）の二首のみ、哀傷歌に院政期歌人が並び、

彼は平安期の歌人が占める、同集の中ではやや古風な題材のようである。そのなかで、良経歌は『九代集抄』が「此哥、五文字よりおもしろきとなり」と注するように、初句にまず皮膚感覚を提示する表現に新しさがある。²⁾俊成に「五月雨はたく藻の煙うちしめりしほたれまさる須磨の浦人」(『千載集』夏・一八三／『久安百首』八二七)という、五月雨で「うちしめり」と詠む先例があるが、この語を初句に置いたのは良経の工夫であろう。湿気に香り立つ菖蒲(触覚・嗅覚)、時鳥の声と雨音(聴覚)、夕闇に閉ざされていく視界(視覚)を詠み込む感覚の融合や、三・四句で本歌「ほととぎす鳴くやさつきのあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな」(『古今集』恋一卷頭・四六九・読人不知)と接続することで四季歌に恋の気分を手繰り寄せる本歌取りの手法など、一首は新古今時代の特徴的な歌風を備えている。軒の菖蒲の存在をその香だけで表し、五月雨時の湿潤な情景に恋の気分を揺曳させた良経詠の新しさは際立っている。

藤原為家の『詠歌一鉢』は「ぬし／＼ある事」、いわゆる制詞として、この歌の「あやめぞかをる」と「雨の夕暮」の句を挙げる。³⁾『八代集抄』は本歌の詞を用いながらこの両句によって「全篇新しく幽玄優美の鉢と成侍にや。尤制の詞也」と賞する。一／＼四句に積み重ねた情景を鮮やかにまとめる結句「雨の夕暮」、端午の節句の習俗や実態に触れず、ただ清例にその香のみを捉えた二句「あやめぞかをる」、この歌の中でこそ生きる、制詞にふさわしい両句である。『詠歌一鉢』の列挙する制詞の例は新古今時代の歌句が大半である点においても、当該歌は後世、新古今時代を代表する歌の一として享受されたものといえよう。

ところで、「あやめぞかをる」の句は良経歌以後、近世の二例(松永貞徳『道遊集』七五五、加藤千蔭『うけらが花』三七五)しか見出せないようだが、「雨の夕暮」の句は京極派が好み用いている。『新編国歌大観』によれば、この句の用例は慈円に多く、定家、後鳥羽院、雅経、実朝、順徳院等、新古今時代から建保期頃まで散見する。『詠歌一鉢』の影響か、鎌倉中期にはあまり例が見えないが、京極派の歌で復活、以降の作例は『文保百首』の三首(二条派系の歌人とされる道順・為実と京極派系の歌人公顕の歌)中の二首を除き、ほぼ京極派に集中する。この句の勅撰集への入集も『新古今

集』の良経歌以後では『玉葉集』『風雅集』の次の四首のみである。

つねよりも涙かきくらすをりしもあれ草木をみるも雨の夕暮

〔玉葉集〕恋二・一四七二 永福門院

みぬ世まで思ふもさびしいそのかみふるの山辺の雨の夕暮

〔風雅集〕雑中・一六九四 藤原有家

大井河はるかにみゆる橋のうへに行く人すごし雨の夕暮

〔風雅集〕雑中・一七三〇 京極為兼

やまもとやいほの軒端に雲おりて田面さびしき雨の夕暮

〔風雅集〕雑中・一七七七 足利尊氏

いずれも四季ではなく恋・雑部に採っている点は、制詞であることを多少意識したものであろうか。京極派では他にも、伏見院²（ともに春歌／以下、算用数字は歌数）、永福門院・光厳院・進内親王・正親町忠孝各¹等の例があり、このうち伏見院の春の歌、

うちしめりみどりの梢のどかにて藤の色こき雨の夕暮

〔伏見院御集〕二二二四七

は、良経歌と同じ初句・五句を用いながら、夕暮の雨で視界を閉ざしていく同歌と異なり、夕暮の雨に滲む色彩に富んだ晩春の景を詠出している。なお、下って南朝の天授二（一三七六）、三年に長慶天皇歌壇で詠進された『天授千首』に三首の例（長慶天皇千首¹・宗良親王千首²、いずれも山家の情景を詠む）が見えることも注目される。⁵⁾

岩佐美代子氏は右の『玉葉集』の一首について、為兼が制詞の禁を冒してこの歌を同集に入集せしめたことを、これを踏襲した『風雅集』の三例よりもはるかに価値あるものと評価している。⁶⁾『玉葉集』の先蹤としての価値は大きいですが、ここでは叙景的な歌を三首採った『風雅集』に注目したい。いずれも「さびし」「すごし」と詠む歌で「雨の夕暮」が一定の嗜好のもとに選ばれているとみえる。三首のうち一首は新古今歌人藤原有家の歌で、詞書に「元久元年（一二〇四）七月北野社歌合（未詳）に、暮山雨を」（括弧内は稿者注）とあり、良経より後の例。初二句が同じく『風雅集』雑上に採られた『六百番歌合』の良経詠「みぬ世まで思ひ残さぬながめより昔にかすむ春のあけほの」（一四三五）も想起させる、良経の面影のある一首である。他の二首が為兼、尊氏という同集の重要歌人の作であることも併せ、「雨の夕暮」の撰入

は新古今歌人良経を髣髴させるもの、良経へのオマージュとも捉えられよう。ここから『風雅集』と良経という視点を設けてみたい。⁷⁾

二 軒詠の系譜

良経の『秋篠月清集』には「菖蒲」を詠む歌が十一首見出せる。⁸⁾このうち勅撰集に採られたのは二首、『新古今集』の「うちしめり」詠に加え、もう一首は『風雅集』に採られた次の歌である。

雨晴るる軒のしづくに影みえてあやめにすがる夏の夜の月

〔『風雅集』夏・三八一／『秋篠月清集』五一八、南海漁夫百首・夏〕

南海漁夫百首は建久五年（一一九四）八月以前の成立と推定される。⁹⁾建久六年二月良経家五首歌会の詠とされる「うちしめり」詠と併せ、ともに良経の歌歴では前半、九条家歌壇を主催して新風を模索していた建久期に、時期を接して詠まれた歌である。ただし「雨晴るる」詠は菖蒲の香を詠まない。雨が上がり、軒先をしたたる雫がきらめく、それは月の光——軒に葺いた菖蒲の葉先にすがるような夏の夜の月よ、という視覚的な歌で、古歌撰取もなく、室内から夏の夜の雨上がりの情景を捉えた、すっきりとした叙景歌である。軒に葺いた菖蒲をつたい落ちる五月雨の雫を詠んだ歌として、平安期に「五月雨のいつか過ぎててもあやめ草軒のしづくは雨と見えけり」〔『赤染衛門集』六〇二「あやめ」〕、「つれづれと音たえせぬは五月雨の軒のあやめのしづくなりけり」〔『後拾遺集』夏・二〇八・橘俊綱〕の先例があり、その雫に月の光が映ると加えたところが良経歌の工夫となっている。

良経ののちにも、軒の菖蒲を通して月を見る、同じ視線の歌を詠んでいる。¹⁰⁾

五月雨の雲間待ちいでてもる月は軒のあやめにくもるなりけり

〔『秋篠月清集』七二五、正治初度百首・夏〕

五月雨の晴れ間を捉えるという設定も共通している。菖蒲に限らず、「軒」や「軒端」（以下まとめて「軒」詠と称する）を詠む歌は『秋篠月清集』に四十三首あり、好んだ素材といえよう。「軒」詠はこの時代、流行した。目安として『八代集総索引』（新日本古典文学大系）により分布をみると、「軒」は後撰集1、後拾遺集3、金葉集2、千載集5、新古今集9、「軒端」は金葉集2、千載集6、新古今集6。勅撰集では千載集から新古今集にかけて増加した素材と確認される。良経の「軒」詠四十三首のうち勅撰集入集歌は五首（統後撰・玉葉・風雅・新千載・新統古今の各集）、このうち『風雅集』に採られた「雨晴るる」詠も軒を舞台にしてそこに展開する景を詠む歌と捉え、「軒」詠の系譜に位置づけてみたい。「軒」詠については川平ひとし、中川博夫、稲田利徳各氏の論があり、新古今時代と京極派の例を軸に注目されてきた。川平氏は「軒」を「窓」「戸」などと同様の〈住居系〉の歌語群に位置づけ、新古今時代と玉葉集・京極派の「軒」詠を、〈詩的主体〉の〈視点〉と「隠者的―草庵的な表現様式」という視点から考察する。中川氏は勅撰集の「軒」詠を概観し、軒に直接接触する景物から軒下や軒近くの景物との詠み併せが増えていく過程を追う。そして軒端を定くないし経過点として視線を遠くへ及ぼすところから「遠景を叙する機能」をもつ軒の歌が〈山里志向〉（＝山里隠棲あるいは山中閑居への志向）と相俟って発展したことを指摘して、軒は新古今新風歌人たちが試行し、新古今集には入集せず、京極派が受け継いだ「空間を立体的に把握し、そこに時間の推移を導入して、自然の変化を多重に表現する方法」の中で重要な素材として多用されたと結論づける。稲田氏は「軒端にちかき山」の圧縮表現である「軒端の山」に注目、「軒端の山・嶺・岡」系列の措辞は「山里や深山に住居を構える作中主体の隠遁的な環境や心情」を喚起するという共通認識が、正治・建仁頃の新古今歌壇で形成されていったことを、具体的な用例分析をもとに論じる。さらに「軒端の山」系列の措辞は、「素材的にも表現的にも、「新古今集」から洩れている新古今歌人の歌から、彼らの詠歌理念にマッチした歌を見出し、それを粉本にして京極派らしい味を出そうとする」京極派の詠歌手法に該当するものと言及している。三氏の論より「軒」をめぐって、「主体の視点」（とくに室内からの視線）、「山里志向」（隠遁志向、隠者的な主体の設定）、「新古今時代の試みか

ら京極派への展開」という論点を見せよう。これらをふまえつつ、以下、良経の「軒」詠を見渡したうえで、「山里志向」と「京極派への展開」の二点について取り上げてみたい。⁽¹⁴⁾

『秋篠月清集』の「軒」詠四十三首で、軒と取り合わせている素材を列挙すると、

〔天象〕 雨 17 (五月雨 9・時雨 3・他の雨 5) 風・月 11 雪 6 雫・露 3 玉水 2

〔植物〕 梅 6 松・橘 5 菖蒲 4 忍草 3 杉 2 正木・真木・萩 1 (動物) 時鳥 4 鶯・狐・蜘蛛・蛭 1

となり、五月雨(景物の取り合わせから五月雨とわかるものも含む)を中心に雨(及びそれに伴う雫・玉水)と、風、月がとくに多い。また題や部立、景物から季節のわかる歌を数えると、春 6、夏 16、秋 5、冬 7(春・夏は各々一首ずつ祝部の屏風歌を含む)となり、五月雨・菖蒲・橘・時鳥等を詠む夏の歌が突出している。定数歌では春・秋の歌数の方が多いことを考えれば、夏歌への集中(冬歌も多い)は注目されよう。夏の歌で雨・雫・月を詠む「雨晴るる」詠は、良経の「軒」詠の中で中心的な季節・素材を扱った歌ということになる。

当該歌は良経「軒」詠の詠歌時期の分布からみても中心的な時期に詠まれている。『秋篠月清集』は前半に十一の定数歌をほぼ成立年順に収め、後半は部類歌になっている。次にその出典ごとに「軒」詠の数を列挙してみる(定数歌はおおよその成立年順に並べ替えた)。

〔定数歌〕 花月百首 0 二夜百首 1 十題百首 7 六百番歌合 1 南海漁夫百首 2 治承題百首 6 西洞隠士百首 4

正治初度百首 1 院無題(老若) 五十首 1 院句題五十首 2 千五百番歌合 3

〔部類歌〕 春 1 夏 4 秋 2 冬 3 祝 2 恋 1 旅 0 雑 2 哀傷・無常・神祇・釈教 0

出典別では十題百首・治承題百首がとくに多く、西洞隠士百首が次ぐ。いずれも建久期の詠作で、「軒」詠は九条家歌壇を主催した建久期に盛んに試みられたことがわかる。南海漁夫百首の「雨晴るる」詠もこの時期(十題・治承題両百首の間)に位置する。

西洞隱士百首は建久七年(一一九六)十一月二十五日の政変による九条家失脚後の失意の時期の詠。「西洞隱士」という設定で百首全体に山家・隱遁への志向が強く、「軒」の使用は首肯される。一方、治承題百首は神祇五首中一首目に建久六年二月公卿勅使として伊勢神宮に發遣された折の詠を含むことから、同年三月以降、同七年十一月の政変以前の詠と推定されている。父兼実が治承二年(一一七八)に主催した右大臣家百首の歌題を詠むもので、家の百首を踏襲する意識が指摘される。また十題百首は建久二年閏十二月四日、良経邸で披講された。政教性の強い歌が多く、文治六年(一一九〇)正月に後鳥羽天皇に入内した妹任子への期待と予祝が背景にあるとされる。¹⁵⁾十題・治承題百首は、ともに撰閑家の家嫡として前途を意識した前向きな心境の時に詠まれた百首で、こうした政治性の強い詠歌の場に、山里志向を呼び込むような「軒」詠が浮上してくることは注目されよう。この傾向は良経の山里ないし隱遁志向が、撰閑家家嫡としての意識と表裏一帯の関係にあることを物語っているのではないだろうか。

中世の「軒」詠一般と同様、良経の「軒」詠四十三首においても、趣向として目に立つのは山家という設定の見える歌である。試みに題に「山家」とあるもの、「山里」「庵」他、都外の住居を示す素材が詠み込まれているものを数えると、少なくとも十七首ほどが該当する。例を挙げて、軒のある山家の情景はどのように詠まれているのかみていきたい。

- ① 野中なる蘆のまろやかに秋すぎてかたぶく軒に雪おもるなり
〔秋篠月清集〕冬部・一三二「野亭深雪」
- ② 五月雨に柴の庵はかたぶきて軒のしづくのほどぞみじかき
〔秋篠月清集〕四二二、治承題百首・五月雨
- ③ 軒近き真木の梢にゐる雲のかさなるままに五月雨の空
〔秋篠月清集〕夏部・一〇六六「山家五月雨」
- ④ 山おろしの吹きそふままに雪落ちて軒端の岡になびく白雲
〔秋篠月清集〕六七三、西洞隱士百首・冬

①は文治五年(一一八九)十二月良経家雪十首歌合の歌で、良経の「軒」詠で詠歌年次のわかる最も早い例。前年二月の兄良通の死後、良経が家嫡になって主催した(記録に残る)最初の歌合で、山野の「軒」詠は良経の和歌活動の始発期から見出されることになる。本歌「夕されば門田の稲葉おとづれて蘆のまろやかに秋風ぞ吹く」〔金葉集〕秋・一七三・源

経信)にもとづき上句に蘆葺きの家を設定し、その秋の景から下句の冬の景へ展開させた、本歌の時間を経過させる型の本歌取りで、下句の「かたぶく軒」、「雪おもるなり」はともに新しい表現である。¹⁶粗末な「蘆のまろや」の傾いた軒が雪の重みで拉げそうになっているさまを詠む①に対し、②では粗末な草庵「柴の庵」が五月雨の雨量で傾いたさまを、軒の雫の落下する距離で表している。ともに外からの視線で山野の住居を描写した絵画的な歌である。¹⁷なお、治承題百首の「五月雨」題の歌は五首中三首に「軒」が詠まれている。

対して③④は、室内から軒を通して外界の広い景を見ている歌である。③は軒近くに見える真木(杉や檜等)の梢に迫るように雲が低く垂れこめ、その雲の重なるの先に見える空から五月雨が降り出す。④は山から吹き下ろす激しい風に屋根に積もった雪が吹き下ろされ、軒先に見える岡に白雲がたなびいているように見えるといい、風に流れる雪を白雲に見立てている。「軒端の岡」は良経が当該歌(西洞隠士百首)以前に主催した『六百番歌合』の家隆の歌「思ひかねながむれば又夕日さす軒端の岡の松もうらめし」(一〇四四「寄木恋」、良経と番い持／『新勅撰集』恋五・九九四)に入集／『壬二集』三八七では初句「思ひわび」が初出で、新古今時代を中心に散見する。「雪落ちて」は「折梅花而挿頭、二月之雪落衣」(『和漢朗詠集』上・春・子日・三〇・尊敬)、「百花落如雪」(『白氏文集』卷六・〇二三九「晚春沾酒」)等に通じる、軒先に散る落花を思わせる漢詩的な表現であろうか。③④とも「かさなるままに」「吹きそふままに」と時間経過に伴う天候の変化が詠まれており、軒という一点を見つめ続ける詠歌主体の姿が浮かぶ歌である。

以上、軒を通して外を見る視線と、その人物のいる家自体を山野の景観の中に捉えようとする外側からの視線が交錯し、閑居の情景をつくりあげている。良経が心を遣る場として山里の閑居の空間を想像するとき、「軒」はその場の重要な構成要素になっている。「雨晴るる」詠の舞台は都とも山家とも読めるが、軒先の菖蒲の雫に映る月光という絵画的構図と、雨後の情景という時間経過、右にみた特徴を兼ね備えた、いわば動画的な歌となっている。

三 良経から京極派へ

ところで、軒近くの梢から遠くの空へ、雲の重なるの先に五月雨の空を見出す良経の③は、幾重にも立ち重なった夕霞の果てが雨になっていたと詠む伏見院の歌「山の端も消えていくへの夕霞かすめる果ては雨になりぬる」(『玉葉集』春上・九七)を想起させないだろうか。良経は十題百首の歌「昨日今日千里の空もひとつにて軒端にくもる五月雨の宿」(二〇三・天象)でも、空一面を覆う五月雨の雲が軒先に迫ってくる情景を詠んでいる。この「軒端にくもる」は用例の少ない語句で当該歌が初出、伏見院も「吹きはらふ松のうへより降りそひて軒端にくもる雪の山風」(御集・一六六二「冬山家」と詠んでいる(他は雅経・実陰のみ)。伏見院は「雨の夕暮」も詠んでおり(↓一節)、他にも複数の軒をめぐる表現を良経から継承している。ここでやや煩雑になるが、良経から京極派に継承された軒をめぐる表現を見渡してみたい。

⑤ たづねこむ人知らぬまでなりぬべし軒端をとづる峰の杉むら

〔秋篠月清集〕二四八、十題百首・木部

⑥ 深き夜の階はしにしただる秋の雨の音たえぬれば軒端もる月

〔秋篠月清集〕九七二、院句題五十首・雨後月

⑦ 暗き夜の窓うつ雨におどろけば軒端の松に秋風ぞ吹く

〔秋篠月清集〕秋部・一二二九「秋夜に」

⑧ もりかはる軒端の月に雲すぎて時雨を残す庭の松風

〔秋篠月清集〕五四二、南海漁夫百首・冬

まず、良経が初出の表現では⑤の「軒端をとづる」も、伏見院に「山かげやちかき松さへ消えはてぬ軒端をとづる秋の夕霧」(御集・八五七)という例が見える。⑤の鬱蒼とした杉林に囲まれた庵の情景に対し、伏見院は軒に近い松さえ隠すほど立ち込めた夕霧を詠んでいる。また「雨後月」題で詠まれた⑥は、「雨」の情景を具体化するのに本文「三秋而宮漏正長、空階雨滴」(『和漢朗詠集』上・秋・落葉・三〇七・張詠)を用いている。「空階」は人影のない階段、⑥では秋の長夜、雨音から軒端の月の光へ、聴覚から視覚への展開で時間経過が詠まれ、その音と光を感じとる主体の孤身が想像

される。伏見院の「人は来ずはしにしたたる秋の雨をむなしき床に聞き明かすかな」(御集・四一七「秋階」)は、⑥の影響歌である。「はしにしたたる」の例は他に『雨中吟』に見える一首のみ。ただし「軒」は捨象され聴覚に絞って空聞の要素が前面に出されている。⑦も漢詩文撰取の例で、本文としてよく撰取される『白氏文集』卷三・〇一三一「上陽白髮人」の「蕭蕭暗雨打窓聲」(『和漢朗詠集』上・秋・秋夜・二三三)により「暗き夜の窓うつ雨」の場面を設定し、暗闇の中感知した窓打つ雨の音を軒端の松を吹く秋風の音に転じてゆく聴覚的な歌。本文の閉じ込められたまま年老いた宮女の怨情を想定すれば、「松」「秋」には「待つ」「飽き」の含意もあるだろうか。この「軒端の松」の語は良経を含む新古今歌人の試みが京極派に継承されたもので、勅撰集では⑦が後世『新統古今集』に入集した以外に、玉葉集5・風雅集2にしか見えない²⁰。同様に「軒端の杉」も三節の注16に挙げた定家詠(『新古今集』六七二)が初出で良経詠(『秋篠月清集』一二七七)が続き、勅撰集にはこの定家詠と『玉葉集』の伏見院詠(四八七)のみ。また良経「見る夢はみやまおろしにたえはてて月は軒端の峰にかかりぬ」(『秋篠月清集』秋部・一一七七)の「軒端の峰」は句を跨ぐが、句としての初出は『千五百番歌合』二七七〇の公経詠で、勅撰集には玉葉集2・風雅集1のみ、等の例を見出せる。なお、軒詠に付随する表現として、⑧の下句が『玉葉集』の「おとづれし山の木の葉は降りはてて時雨を残す峰の松風」(冬・八七三・法印憲実)に踏襲されている。以上、良経の「軒」詠も、新古今時代に創出された表現が京極派に継承されるという展開の中に位置づけられよう。とくに伏見院との関係は注目される。

四 瓦の松の情景

『玉葉集』には良経初出の語「軒端の苔」を含む次の歌が採られている(「軒端の苔」の勅撰集入集は玉葉集の当該歌のみ。なお「苔」の「軒」を詠む歌については注5の中川氏『玉葉和歌集』下・当該歌補注が考察している)。「山家の心を」

と題して「瓦」と「松」を詠むが、軒詠で「かたぶく」と詠むものは月が多く、松は珍しい。草庵に瓦屋根はそぐわないようだが、これはどのような光景なのだろうか。

⑨山かけや軒端の苔の下朽ちて瓦の上に松ぞかたぶく

〔秋篠月清集〕雑部・一五〇五／『玉葉集』雜三・二二二〇、第五句「松風ぞ吹く」

「苔の下」と「瓦の上」が対句的でもあるが、諸注が指摘するように、「瓦」の「松」は漢詩句「翠華不_レ來歲月久 牆有_レ衣兮瓦有_レ松」（『白氏文集』卷四・〇一四五「驪宮高」）にもとづいている。上句の軒端の「苔」も同句によるものだろう。驪宮は長安東郊の驪山にあった離宮で、玄宗皇帝が楊貴妃のために華清宮を設けたが、のちに破壊され荒廢した。掲出句の「衣」は牆壁を覆う苔、「松」（瓦松）も苔の一種（シノブグサ、シダ類とも）で、古宮の荒廢を象徴する景である。和歌ではこの詩句をふまえ「瓦の松」を苔の意で詠むものと、良経のように松の木を詠むものがある。後者の例では早く源俊賴に「屏風の絵に、荒れたる家の棟に草や木など生ひ茂りたるしたに、家あるじとおほしき人の老いたるかたかける所をよめる」と題する歌「わが宿の瓦の松のこたかさ_レに身のふりにけるほどをこそ思へ」（『散木奇歌集』一四〇七）があり、俊成は恋歌で「ふりにける瓦の上の松が根の深くはいかが人を頼まん」（『続古今集』恋四・一二五六「寄松恋を」、これ以前の他出なく詠歌年次未詳／「瓦の上（の松）」の例は他に後代の頓阿の連歌（『続草庵集』五九七）のみ）と詠む。松の木を詠む良経歌は両者に触発されたものだろうか（なお祖父忠通の『法性寺関白御集』に「驪宮高」と題する漢詩がある（「瓦松」の語はない）。ただし⑨では両詠の傍線部のように、瓦屋根の上に松の木が生えているわけではない。瓦屋根の上に覆いかぶさるように家屋の脇に生えている松の木である。山陰にあり、日が松の木にも遮られるため、軒端に苔が生え、下が朽ちているのだろう。ではこれは、どのような家屋だろうか。

『千載集』には「驪宮高」をふまえて苔の意で「瓦の松」を詠む例「ふるさとの庭は木の葉に色かへてかはらの松ぞ緑なりける」（秋下・三七六「故郷落葉といへる心をよめる」・惟宗広言、龍門文庫本は第四句「かはらぬ松」）があり、驪

山の華清宮を念頭に古宮の庭の紅葉を詠んだと解されている。また⑨に酷似する「ふりにける宿の軒端は朽ちはてて瓦の松の末ぞかたぶく」（建武五年朗詠題詩歌・二二九・淨弁）も「古宮」題の歌である。ただしこの歌の「瓦の松」は苔やシノブグサの類であろう。また他の「瓦の松」の用例は「人すまぬ野寺の小篠よよふりて瓦の松にくもる月影」（建保四年八月廿四日歌合・二一・行能「古寺月」）のように大半が「古寺」を詠み、古びた寺を表すために瓦の苔を詠むもので、『為尹千首』四三八「古寺月」・五七四「古寺雪」（後者は歌中に「寺」の語を詠まず、「瓦の松」と「入相の声」で「寺」を表す）、『雅世集』八二二「古寺霧」、『草根集』八八二「宮寺」等の例がある。これらから「驪宮高」をふまえた歌の苔むした瓦屋根は古宮か古寺のものと想像されるが、「松の木」を詠む良経詠については、もう少し考えてみたい。

「驪宮高」の作者白居易は長安の自邸の松の木を賛美する詩を多く残している。元和十五年（八二〇）忠州から長安に召還され、長慶元年（八二二）十月、中書舎人に任じられた白居易は、同年二月、長安の街東中南部の新昌に初めて自宅を購入した。²⁴「簷漏移傾瓦」と描写される「舊屋」に手入れをして（『白氏文集』卷十九・一二五九「新昌新居、書事四十韻。因寄三元郎中・張博士」）、山を望む（一二五九「簾每當山卷」）この家屋を「吾廬」（わが草庵）と称した（同・卷十一・〇五七四「詠松竹」）。「坐愛前簷前」「簷松有嘉色」（同・〇五七五「其二」）と詠み、家の正面の軒の前に植わった松を愛したが、この松（十松）は高いもので三丈、低いもので十尺、「接以青瓦屋」「承之白沙臺」と形容される（同・〇五六八「庭松」）。この「門戸を蔽う数本の松に象徴され」（妹尾氏、以下同）る自邸のあった新昌は、高台に位置する閑静な高級住宅街で、白居易にとって「名実ともに高官達の集う中央政界への参入を許された場所」であり、皇帝の起居する繁忙な政治都市・長安で政府高官を目指す官人生活を象徴する場であったとされる。「山家」すなわち閑居や隱棲とは対極にある場ということになるが、良経歌⑨の情景は（他の「瓦の松」詠に見えるような古宮や古寺ではなく）、「瓦有松」の詩句を媒介として作者白居易の自邸の瓦屋根の軒先にかかる松のイメージ——あるいはその邸宅が主人を失い荒廃した情景——を引き寄せている、と考えられないだろうか。

良経には隠遁への憧れがある。谷知子氏はその隠遁志向を、身は朝廷に仕えても、和歌世界の中で心だけは山里へ解放しようとする姿勢、精神的次元での隠遁と捉え、慶滋保胤の『池亭記』に典型的な官人生活と信仰生活を両立させる平安時代の文人貴族や、遡って吏隠同一の心境を標榜した白楽天の系譜に位置づける。また山家の具体的な情景として、慈円の住む「深山幽谷」への憧れや、祖父忠通が俗世の政情から隔絶した仙境として愛し、兼実が正治元年に新御所を造営して数寄の地と見做し、良経自身も頻繁に訪れ隠遁の地を表す「山」を題に用いる詩歌を詠んだ「法性寺」（京の東南部という所在地は新昌に通じる）を指摘する。⑨も以上の指摘とは異なる視点から良経の山家の情景の形成に文人官僚白居易の漢詩の世界が取り込まれた例と考えてみたい。なお、この歌は『玉葉集』では第五句が撰者為兼によって「松風ぞ吹く」と改変されており、軒に接する松の木の構図は捨象されている。

五 『風雅集』夏部の良経

三節で良経の「軒」詠をめぐる表現が京極派に継承されていることを確認した。ここで『風雅集』に採られた「雨晴る」詠に戻りたい。雨後の月の光は京極派が好んだ情景であり、時間の推移の中に捉えられる繊細な動的自然、恋の物語等を喚起しない、寓意のない叙景と、その景を見つめる室内からの静かな視線という同歌の詠みぶりも、京極派の歌風に通じよう。この歌を起点に『風雅集』の良経について考えてみたい。

良経の歌は『風雅集』に十五首入集している。これは『玉葉集』の入集数十六首を踏襲するものとひとまず捉えられそうだが、勅撰集史の中で具体的に確認してみる。良経は千載集から新統古今集まで十五代すべての勅撰集に総計三二〇首入集している。⁽²⁷⁾ 次頁の表に示したように、没後も新勅撰集以降、続古今集までは撰者と九条家の深い関係もあり入集歌数は多い。また時代が下るにつれて未収録の残歌が減っていく中で、歌数・比率とも続古今集と同等にしている新統古今集

良経の勅撰集入集歌数

歌集名	良経入集歌数	総歌数	比率 (%)
⑦千載集	7	1288	0.5
⑧新古今集	79	1978	3.9
⑨新勅撰集	36	1374	2.6
⑩続後撰集	28	1371	2
⑪続古今集	27	1915	1.4
⑫続拾遺集	19	1459	1.3
⑬新後撰集	14	1607	0.8
⑭玉葉集	16	2800	0.5
⑮続千載集	11	2143	0.5
⑯続後拾遺集	10	1353	0.7
⑰風雅集	15	2211	0.6
⑱新千載集	9	2365	0.3
⑲新拾遺集	8	1920	0.4
⑳新後拾遺集	11	1554	0.7
㉑新続古今集	28	2144	1.3

は明確に新古今・続古今を意識していることが見て取れる。その間、鎌倉後期の二条派の撰集で、新後撰↓続千載↓続後拾遺と下がる（比率も1%未満になる）流れ（以後、南北朝期も続き、新千載集・新拾遺集が各々歌数・比率で最少）の中で『風雅集』を見れば、『玉葉集』を継いで良経を積極的に評価していると捉えられよう（これは両集が新古今を評価しているということでもある）。『玉葉集』には家隆が定家に詠み贈った良経哀傷歌（雑四・二三九七）が入集し、『風雅集』が詞書にその家隆詠を記して定家の返歌（雑下・一九八三）を載せていることも、良経をめぐる両集の呼応を示している。

良経の『風雅集』入集歌十五首の部立の分布は、春2・夏4・秋3・恋1・雑3・賀2（四季9・他6）。夏が多く、冬・旅・釈教・神祇の部には入集していない。同集の各部立の歌数は、春上中下300、夏145、秋上中下279、恋1〜545、雑上中下630、賀56で、良経歌は比率を見ても、賀歌に次ぐ夏部が目立つ以外は『風雅集』より満遍なく分布していることと比しても、秋1・冬2・恋2・雑5・釈教2・神祇1と、雑部が目立つ以外は『風雅集』より満遍なく分布していることと比しても、『風雅集』の良経歌は夏部に特色があるといえよう。以下、四首（三〇一・三六八・三八一・三八九）採られている『風雅集』夏部（三〇一〜四四五）の良経について、入集歌を軸に、i 巻頭歌と、ii 菖蒲、iii 五月雨、iv 夏の月の各歌群から考えてみる。

i 『風雅集』夏部は巻頭に次の良経歌を置く。

後鳥羽院より召されける五十首歌の中に 後京極摂政前太政大臣

昨日までかすみしものを津の国の難波わたりの夏のあけぼの

(三〇一)

建仁元年(一一〇一)二月、後鳥羽院の主催した老若五十首歌合の一首である。能因・西行に、

心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春のけしきを

(『後拾遺集』春上・四三 能因)

津の国の難波の春は夢なれや葦の枯葉に風わたるなり

(『新古今集』冬・六二五 西行)

と詠み継がれた「津の国の難波わたりの春」を引き継ぎつつ、「夏のあけぼの」を提示して、夏のはじまりを告げる開卷宣言として機能している。「夏のあけぼの」は新古今時代の四首(当該歌以外に慈円1と当該歌に触発されたと思われる後鳥羽院2)のあと室町期以降に四首しか見えず、文治・建久期に流行した「くの曙」という歌語群の中ではあまり展開しなかった。この「夏のあけぼの」の語を含む歌を、『風雅集』は勅撰集で唯一しかも巻頭歌として採っている。南北朝期以降の勅撰集では四季部の重要性が指摘されていることから、いま同集の四季部に注目して巻頭歌人を見ると、

〔春上〕為兼・〔春中〕花園院・〔春下〕後嵯峨院・〔夏〕良経・〔秋上〕定家・〔秋中〕俊頼・〔秋下〕顕輔・〔冬〕公任

となる。『玉葉集』撰者で京極派の中心人物為兼を全巻の巻頭に置き、本集監修者の花園院、両統の祖後嵯峨院が続く。

定家以下は各々勅撰集(新古今/新勅撰・金葉・詞花・拾遺)の撰者で、良経は唯一、撰者でも上皇でもない。両者の繋ぎ目に廷臣代表として特別な位置を与えられているとみえる。この厚遇は良経が夏部の構想に関与することを示唆するものではないだろうか。

ii 「菖蒲」歌群(三四四〜三四八)では五首中、四首に「軒」、四首が「五月雨(ないし雨)」「うち三首は両者」を詠む。この歌群中に良経詠はないが、「菖蒲」「軒」「五月雨」に雫/玉水も詠み込む次の二首は、「雨晴るる」詠の影響歌であらう。以下、詞書は省略して引用する。

あふちさく梢に雨はやや晴れて軒のあやめに残る玉水

(三四六 前大納言経親)

あやめつたふ軒のしづくもたえだえに晴れ間にむかふ五月雨の空

(三四七 院冷泉)

前者は伏見院近臣で前期京極派歌壇構成員の平経親の詠、後者は後期京極派歌人の花園院冷泉の詠、「雨晴るる」詠と異なり「月」は登場しないが、晴れ間に向かう雨後の情景を軒の菖蒲を伝う水滴で表している。

iii 「五月雨」歌群(三五九～三六九、十一首)では、歌群終盤の定為の次の歌が「雨晴るる」詠の影響歌で、五月雨、晴れ間、月光、軒の菖蒲、露と構成要素がすべて重なる(比べると、良経「あやめにすがる」の斬新さが際立つ)。

五月雨の晴れ間待ちいづる月かげに軒のあやめの露ぞすずしき

(三六七 法印定為)

五月雨の雲をへだててゆく月の光はもらで軒の玉水

(三六八 後京極摂政前太政大臣〔良経〕)

定為は二条為氏の子、為世の同母弟で二条派の歌僧、右は『文保百首』の詠。ここでは良経の影響歌三六七と良経歌三六八を並べている。三六八は治承題百首の「五月雨」題の歌で、「雨晴るる」詠や二節に挙げた良経詠(『秋篠月清集』七二五)と似た視線・構成になっている。あるいは「五月雨」歌群一首目の為子の歌「山かげや谷よりのぼる五月雨の雲は軒まで立ちみちにけり」(三五九「山家五月雨」)の軒先に迫る五月雨の雲の情景も、前掲の良経歌③(↓二節)や『秋篠月清集』二〇三(↓三節冒頭)と通じるところがあるかもしれない。以上、夏部中盤のii iiiをいわば伏線として、後半の「夏月」歌群中に「雨晴るる」詠が登場する。

iv 「夏の月」の歌十三首(三八〇～三九二)は、『玉葉集』の十二首と並び、勅撰集中特異の多数であることが指摘されている。²⁹⁾この京極派の特色を示す歌群中に、良経の「雨晴るる」詠(三八一)と次の歌が採られている。

夕立の風にわかれてゆく雲におくれてのぼる山の端の月

(三八九「雨後夏月といふことを」)

三八九は『秋篠月清集』夏部(一〇九〇)に「雨後夏月」題で見える年次未詳の歌、建久九年(一一九八)五月二日の奥書をもつ後京極殿百番自歌合に入っており、それ以前の建久期の詠と知られる。夕立を降らせた雲が風に吹かれて去った

山の端に昇る月を捉えて、題にもとづきつつ、「雨晴るる」詠同様、時間の推移の中に夏の月が詠まれている。「雨晴るる」詠は五月雨、三八九は夕立と、二首とも雨後月を詠む。「夏の月」歌群の中で雨を詠むものはこの二首のみであり注目されよう。さらに『風雅集』夏部には「雨晴るる」の語が散見する。この語は良経当該歌が早く（家隆にも年次不明の歌がある）、中世に多数見えるが、勅撰集は新後撰²、玉葉¹、続千載²、風雅³（良経当該歌以外に、春上・八八・永福門院内侍、夏・三五八・花園院一条）、新後拾遺¹、新統古今¹で、夏歌の入集は『風雅集』が初。また「雨晴れて」も見ておくと、用例が『万葉集』のあと院政期まで飛び、中世に多数。勅撰集には続千載¹、風雅⁴（夏の三五七及び四一八・進子内親王、四二五・俊成卿女、雑中・一六九八・永福門院内侍）、新拾遺¹、新後拾遺¹で、やはり『風雅集』に多く、かつ三首が夏の歌となっている。「雨はやや晴れて」と詠む前掲三四六も含め、「雨晴るる」及び「雨晴れて」は『風雅集』夏部に特徴的に見出せる語といえよう。その淵源に良経詠があることは、以上に見てきた同詠の扱いより知られる。

以上 ii iv より、良経は『風雅集』夏部で時間経過を伴う「雨」の情景に存在感を示していると捉えられる。鹿目俊彦氏は『玉葉集』『風雅集』では四季部全般にわたって「雨」の歌が増加すること、『風雅集』の場合、「雨」の歌の入集は夏部が最も多いことを指摘する。³³ 良経詠は「雨」という同集夏部の特徴的な構成要素に生かされていることになろう。『風雅集』は良経の夏の雨の歌のもつ動的に把握された自然や繊細な視線のもたらす清涼感を、その影響歌も散りばめつつ、夏部の構成に活用していると考ええる。

おわりに

良経の菖蒲詠として新しさの見える二首を取り上げ、そこから京極派和歌及び『風雅集』との接点を探ってみた。良経の二首「うちしめり」「雨晴るる」も一般的な菖蒲詠同様、屋根に葺いた菖蒲を詠むが、その捉え方は新鮮である。雨や

夕暮や月光を伴う良経の菖蒲詠は、それらを好む京極派歌人の創作意欲を刺激したのだろう。嗅覚と視覚で外界と室内をつなぐ存在——室内にいて流れてくるその香を感じ取り、軒端にその葉先を見る良経の二首は、そうした菖蒲の魅力と表現の可能性を引き出したものといえようか。

注

- (1) 『新古今集』夏・二二〇～二二四、哀傷・七六九～七七二、恋一・一〇四二～一〇四三、恋四・一二四〇、雑上・一四八九（このうち、二二二・七七二は菖蒲の語は詠み込まない）。二二〇・七六九以外は節句の「今日」を詠み（二二二）、詞書に「五月五日（ないし六日）」と記すなど、節句に関わる歌。
- (2) 以下、新古今集の古注の引用は『新古今集古注集成』（笠間書院）による。『新古今増抄』も「雨の日香りもしみぐくと深きものなり。陰気に包まれて散ゆかぬ也。雨気の時けぶりの外へゆかぬごとく也。それにて打しめりと五文字に置かれたり」と注して、雨のもたらす湿気が香を濃くすることを示す初句の機能に言及する。
- (3) 引用は岩佐美代子『藤原為家勅撰集詠 詠歌一躰 新注』（青簡舎、二〇一〇年、底本は冷泉為秀筆本）による。「夏」の項は西行の「すずしくくもる」（新古今集・二六三）とこの二句のみ。なお二条家系統本では制詞に当該の二語はない。
- (4) たとえば良経自身の他の菖蒲詠にも、「菖蒲のねをかくる」「軒の菖蒲」等、菖蒲の状態に言及する歌は散見する。
- (5) 「雨の夕暮」についてはないが、中川博夫氏が『中世和歌論 歌学と表現と歌人』（勉誠出版、二〇二〇年／以下A）や和歌文学大系『玉葉和歌集』上下（明治書院、二〇一六・二〇二〇年）、『中書王御詠新注』（青簡舎、二〇二二年）「解説」等で、歌語の表現史を辿り、「新古今 関東歌壇—京極派—南朝」と継承されていく道筋を指摘している。
- (6) 岩佐美代子「玉葉風雅表現の特異性」（『京極派歌人の研究』改訂新装版、笠間書院、二〇〇七年／初版一九七四年、初出二一九六九年九月）四二八頁。さらに特異句として「ゆぶぐれのあめ」（玉葉3・風雅9）も挙げている。
- (7) 以上、良経の「うちしめり」詠と次節に掲げる「雨晴るる」詠については、拙稿「良経の菖蒲」（中世の文学『新古今増抄』七「月報」、三弥井書店、二〇一七年一月）で取り上げた。本稿では同論を取り込みつつ、両詠と『風雅集』及び京極派との関係という視点から改めて考察してみた。

(8) 『秋篠月清集』二三三、五一八、六二六、七二五、九二四、一〇六七、一〇七七、一〇七九、一〇八〇、一〇八一(二〇八二・藤原家房との贈答歌)、一三五二。

(9) 詠出後に慈円の北山樵客百首と結番した南海漁夫北山樵客百首歌合(『拾玉集』所収)の跋文に「建久五年仲秋記之」とある。ただし同歌合は、建久六年三月の伊勢公卿勅使下向時の詠を切入れている。新日本古典文学大系『中世和歌集 鎌倉篇』(同歌合は片山享校注、岩波書店、一九九一年) 参照。

(10) 良経が女房歌人八名に詠進させた百首歌(『六百番歌合』の後番とも)の披講後に、良経・慈円・定家・俊成・寂蓮らが出詠した五首歌(拾玉集・拾遺愚草によれば題は春夏秋冬恋)とされ、家集には同じ折の歌が他に二首見える(春部・一〇四六、恋部・一四二四)。この歌会については、森本元子『私家集の研究』(明治書院、一九六六) 三三二頁、久保田淳『新古今歌人の研究』(東京大学出版会、一九七三年) 七三三頁、片山享『校本秋篠月清集とその研究』(笠間書院、一九七六年) 研究篇V「藤原良経詠歌年次考」、和歌文学大系『秋篠月清集/明恵上人歌集』(秋篠月清集は谷知子校注、明治書院、二〇一三年) 等参照。

(11) 注10の和歌文学大系『秋篠月清集/明恵上人歌集』が言及する。

(12) 川平ひとし「軒に夢みる——中世和歌における〈視点〉——」(『中世和歌論』笠間書院、二〇〇三年、初出〓一九九一年一月)。中川博文注5前掲書A「軒」をとおして(初出〓一九九七年三月)。稲田利徳「軒端の山」考——中世和歌の隠遁的措辞の形成——(『国語国文』六九一八、二〇〇〇年八月)。三氏とも論の前提として、「軒」詠の用例数(川平氏は八代集、中川氏は二十一代集+万葉集・新葉集、稲田氏は二十一代集)を掲示する。稲田氏は「軒」と「軒端」を意味のやや異なるものとして区別して挙げている。

(13) この詠歌手法については、早く稲田利徳「玉葉・風雅から幽斎へ」(『和歌史 万葉から現代短歌まで』(共著) 和泉書院、一九八五年)、同「京極為兼——新古今時代の和歌の享受」(『国文学』四二—一三、一九九七年一月)で論じられている。

(14) なお良経について、川平氏は内に在る主体の視座を分析する中で、中川氏は六家集歌人と京極派の試みの関係を論じる中で、稲田氏は隠遁志向と連動する措辞(「軒端の松・杉・正木・岡」等)を取り上げる中で言及する。稲田氏が「全歌数に占める「軒・軒端」の歌の比率の多い」私家集を列挙する中で、『秋篠月清集』を「花園院御集」「伏見院御集」に続く三位に挙げている。

る点が注目される。

(15) 以上、十題・治承題・西洞隱士各百首については、注10の久保田氏前掲書・第三篇第二章第三節「新儀非拠達磨歌の時代——建久期——」及び和歌文学大系『秋篠月清集／明恵上人歌集』参照。

(16) 「かたぶく軒」は『新編国歌大観』ではこれが初出、室町期に少数の用例が見える。定家に「軒ぞかたぶく」(『拾遺愚草』一六九八)の例があり、川平氏注12論文が『白氏文集』の詩句「簷漏移傾瓦」と通い合う表現と指摘して、良経の①詠も参照として掲げる。「雪おもるなり」は同歌合に参加した定家も「山家雪」題で「待つ人のふもとの道はたえぬらん軒端の杉に雪おもるなり」(『新古今集』冬・六七二／『拾遺愚草』二四六三)と同じ五句を詠んでいる。後年の良経歌「うちはらひ今朝だに人のとひこかし軒端の杉の雪の下折れ」(『秋篠月清集』冬部・一二七七)又影供に、山家朝雪」の人を待つ設定と「軒端の杉」と深雪の情景、「山人の木の下道はたえぬらむ軒端のまさき紅葉散るなり」(『秋篠月清集』四三八、治承題百首・紅葉)の点線部の口吻・骨格は、定家の「待つ人の」詠を踏襲するものであろう。良経には、定家詠「しのびすむ心もたへず山かげや軒端にかか
る松の雪折れ」(建久六年民部卿家歌合・一六〇)を参照したと思われる「山里はいくへか雪のつもるらむ軒端にかか
る松の雪折れ」(『秋篠月清集』八六四、千五百番歌合・冬／『続後撰集』冬・五一五)もあり、雪深い山里に軒端を配する情景が定家と
の交流の中で育まれていった跡が見える。なお「雪おもるなり」の入集は勅撰集では定家の『新古今集』当該歌のみ。用例は定
家・良経の当該歌の他、『室治百首』の一首(二二六一・道助法親王)のみ。「雪おもる」は定家にもう一例「雪おもる松のひび
きを友として山路も冬も深き宿かな」(『拾遺愚草員外』二三九)があり、やはり良経の召しによる建久二年六月詠四十七首和歌
の一首。『新古今集』以後、前掲道助詠以外に十例ほど見出せる。

(17) 谷知子「治承題百首」「南海漁夫百首」の世界——『新古今集』巻頭歌の生成——(『中世和歌とその時代』笠間書院、二〇〇四年、初出一九八八年八月)は②について、「『のきのしづく』は閑居のつれづれに詠まれるものだが、良経は人物を排し、
絵画的構図の中で人物不在の閑居を描き出した」ことを指摘、同じ折の軒詠「うちも寝ず待つ夜ふけゆくほととぎす軒にかたぶ
く月に鳴くなり」(四一六「郭公」)や「雨晴るる」詠とともに「絵画的構図」をとる歌としている。

(18) 『千五百番歌合』の藤原良平(良経の弟)の歌「山里は軒端の岡を吹く風にこほりて落つる松の白雪」(冬・一九四四)は良経
の当該歌を参照したと思われるが、「軒端の岡、いと聞きよからず」(季経判)と評されている。

(19) 「窓」を詠む歌は漢詩の世界との親近性が高い。岩松研吉郎「窓の周辺——京極派歌風的一面」(『芸文研究』四六、一九八四年一二月) 参照。良経歌では他に「窓わたるよひの螢もかけ消えぬ軒端に白き月のはじめに」(『秋篠月清集』夏部・一〇九六「螢」)の傍線部も、「空夜窓閑螢度後、深更軒白月明初」(『和漢朗詠集』上・夏・夏夜・一五二・紀長谷雄)による表現で、歌語としては先例もなく珍しい。

(20) ゆえに岩佐美代子『玉葉和歌集全注釈』上(笠間書院、一九九六年)五四一番歌補説は「軒端の松」を「京極派特異句」とし、注5の中川氏『玉葉和歌集』上・同歌補注は京極派以前に新古今歌人が詠出した措辞であることを指摘する。

(21) 注5の中川氏『玉葉和歌集』下・二〇〇五番歌補注に言及がある。『玉葉集』二二二三・永福門院の「軒端の峰」詠に詠まれる「檜原」の「嵐」も良経(千五百番歌合)に先例がある旨、同書で指摘されている。

(22) 白居易の詩文の引用及び解釈は(前引の詩句も含め)、新釈漢文大系『白氏文集』一・二上下・四(岡村繁校注、明治書院、二〇一七・二〇〇七・一九九〇年)による。

(23) 新日本古典文学大系『千載和歌集』(片野達郎・松野陽一、岩波書店、一九九三年)。久保田淳説として引く。

(24) 以下、長安新昌の白居易の自宅については、妹尾達彦「白居易と長安・洛陽」(『白居易研究講座』第一卷、勉誠社、一九九三年)参照。後文の「妹尾氏」とした引用も同論による。

(25) 谷氏注17前掲書「良経の「隠遁」志向」(初出Ⅱ一九九一年六月)及び「九条家と法性寺——忠通から良経へ——」(初出Ⅱ二〇〇二年一二月)。

(26) 岩佐氏注20前掲書・下及び中川氏注5の『玉葉和歌集』下に改変についての評がある。なお『平家物語』巻七・福原落に「驪宮高」を引いて「鶯の瓦、玉の石畳、いづれもいづれも三年が程に荒れはてて、旧苔道をふさぎ、秋の草門を閉づ。瓦に松おひ牆に鶯しげれり。台傾いて苔むせり。松風はかりや通ふらん。」とあるのは玉葉集歌と通じる景か。

(27) 糸賀きみ江「風雅和歌集の新古今歌人」(『中世の抒情』笠間書院、一九七九年)は、『風雅集』における良経の入集状況を分析して、「さほど重んじられていない」『玉葉集』と「同程度の認められよう」とし、入集歌の作歌年次はその生涯の殆ど全般にわたること、四季歌が雑歌の三倍採択されており、四季歌で特質を打ち出そうとした同集の方向に沿うことを指摘する。

(28) 『秋篠月清集』は他人詠を含め一六一〇余首。片山氏注10前掲書に同集補遺として良経歌一六三首を集成する。

(29) 新古今歌人の歌語「の曙」をめぐる試みについては、谷氏注17前掲書『六百番歌合』の歌ことば——新古今前夜から京極派へ——(初出＝一九九四年二月)が論じており、良経当該歌の風雅集入集に言及している。また、高橋介「春のあけぼの秋のゆふぐれ——新古今歌人の一視座——」(『文学史研究』二〇、一九八〇年八月)は「夏のあけぼの」という語ではなく、後拾遺・金葉集の時代の歌が「夏のあけぼの」という時間における郭公の声(傍点引用者)をかなり類型化された形で詠出し、ていることを指摘する。良経当該歌は海浜の夏の曙を設定している点で新鮮味があるか。

(30) 小川剛生『中世和歌史の研究 撰歌と歌人社会』(塙書房、二〇一七年)は、鎌倉後期以降の勅撰集において、四季部と入集歌人の調整等にも使用されるそれ以降の部とでは別物であり、「撰歌の方針も評価の規準も異なっていた」、「四季部こそ集のオモテ(晴)」(一〇頁)と指摘する。

(31) 糸賀氏注27論文は、三四七番歌及び後掲三六七番歌を「雨晴るる」詠と「類似した歌」として挙げる。

(32) 岩佐美代子『風雅和歌集全注釈』上(笠間書院、二〇〇二年)三八〇番歌補説。

(33) 鹿目俊彦『風雅和歌集の基礎的研究』(笠間書院、一九八六年)第三編第三章「夏部の構成と歌題」。『風雅集』の独自性を明示する歌題として「夕立」を検討する中で指摘している。

*引用本文は以下のとおり。いずれも清濁・句読点は私意。適宜漢字を当て、踊り字をひらき、歴史的仮名遣いに改め、送り仮名を補うなど、表記を改めた箇所もある。新古今集：『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書』(伝冷泉為相筆本)、風雅集：岩佐美代子『風雅和歌集全注釈』(笠間書院)、秋篠月清集・和漢朗詠集：和歌文学大系、六百番歌合：新日本古典文学大系、平家物語：新編日本古典文学全集。他の和歌の引用、及び歌番号は『新編国歌大観』による。